



Title	宮崎市定『大唐帝国：中国の中世』河出書房 1968, 89 中公文庫 1988
Author(s)	勝藤, 猛
Citation	大阪外国語大学論集. 1990, 4, p. 303-308
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79525
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〔書 評〕

宮崎市定『大唐帝国—中国の中世』
河出書房 1968, 89 中公文庫 1988

勝 藤 猛

Ichisada MIYAZAKI, *Great Tang Dynasty—
A History of Mediaeval China*, Tokyo, 1968.

by Takeshi KATSUFUJI

1 中世とは何か

著者の中国史時代区分は次の通り。

古代：～後漢の滅亡 中世：～唐・五代 近世：宋～清 最近世：中華民国～

中国の中世は、ヨーロッパ史では、民族大移動開始からルネサンス前夜までに当たるとする（13, 最初頁、140. 以下カッコ内の数字は中公文庫版の頁数）

都市の機能から見た時代区分：古代：農民が住んで、周囲の農地で働く。中世：役人や軍隊が住む政治都市。農業生産の場は郊外の荘園へ移る。近世：商業都市。これについては宮崎『中国史』（岩波全書 1977）上、総論を、中世の荘園については本書39～41, 60, 130, 133～4の各頁を参照。

〔キーワード〕 古代：権力者は富む 経済成長の時代 大商業資本家の発生 純粋な経済行為による富の蓄積 資本家が政治家に対抗できる時代（以上32～4）

中世：経済の停滞 経済成長とまる 金銭の動きにぶる 交易不活発 金づまり＝不景気（以上34～7）谷間の時代＝景気後退の時代（428～9）

近世：周囲から中国にむかっての金の輸入 好景気ふたたび（以上 334）武力より財政（385） 特産品の輸出による銀の吸収（428）

著者は中国全史の景気変動図を作り、こう説明する：

「アメリカのさる経済学者の説に同意して、すべての現象はそれを整理すると、上下する屈折線のグラフになる。……もちろん、中国を中心としたアジア世界の歴史上の貿易統計を手にはしていない。しかし若干の資料を裏づけとして、古今を通ずる貨幣の移動、それが産み出す景気状況を、大まかな曲線にあらわす試みをする」（429～30）

「すべての科学は数量化される傾向にある。これは思考を合理化する一手段である。ここで歴史学にも数量を導入する」(432、最終頁) 文献に残っている数字はかならずしも正確ではない(現在のそれも)だろうが、数字を利用する方法はまったく正しい。ただ「若干の資料」の一部でも見本として示してくれたら、読者には一層わかりやすい。

2 禅 譲

すぐれた概説書は、或る問題を取り上げて、その言及を拾って並べれば、その問題に対するきちんとした叙述になるのが、条件のひとつである。本書ではどうか。まず取り上げるのは、禅譲である。「禅譲とは、上古の伝説にあるように、天子の位を一家で世襲せず、堯が舜に位をゆずり、その舜がまた禹にゆずったごとく、〔他人の〕有徳の士を求めて、帝位を相統させる制度をいう」(84) 禅譲は「表面はいかにきれいごとであるけれども、実質はいつも行われている篡奪と少しも変わらない。……それは陰險な手段にはちがいないが、実質的な効用が存在する。……武力衝突を避け、平和のうちに主権の譲渡を行うのが、禅譲の意図である」(85～6)

前王朝	新王朝	禅譲された人(その地位)	本書の頁
漢	魏	曹丕(魏王)	85
魏	晋	司馬炎(晋王)	112

以上2度の場合では、前の天子は天寿を全うした。ところがこれ以後が悪い。

王朝の交替	新帝(出身)	前の天子の運命	頁
晋→宋	劉裕(将軍)	恭帝、劉裕の使者によって殺さる	208
宋→齊	蕭道成(将軍)	順帝とその一族を殺す	237
齊→梁	蕭衍(武人出身の大臣)	和帝を毒殺	244
梁→陳	陳霸先(将軍)	敬帝を殺す	306
北周→隋	楊堅(外戚)	旧王家＝宇文氏に対する無慈悲な迫害	319

このように整理すると、禅譲についての明快な説明となっていることがわかる。

3 正 統 論

三国時代、魏・呉・蜀のそれぞれの君主が皇帝を称した。しかし同時に複数の皇帝は認められない。「正史『三国志』は晋の陳寿が作ったもの、晋は魏を受けたから、立場上、魏を正統とした」(110) 事実、魏は“中原”の地を領有し、その人口も当時の中国の過半数を占めていたから、正統性を有する。南宋の朱子が蜀を正統としたのは、こじつけである。

晋は三国を統一したから、正統王朝の資格がある。それが南へ移っても、その資格は認められる。北は異民族の弱小王朝ばかりであったことも、根拠のひとつとなる。「東晋はみずから正統王朝をもって任じ、その君主も上級官僚も、軍隊の中核も、北方人である。したがってその国は

は、いずれの日か中原を回復し、都を洛陽に返すことである」(146) ただし中原回復の悲願は達成されなかった。「南北朝対立の時代、南を正統とするのが常識となっている」(宮崎『中国史』上 p 261)

次に天下を統一したのは、隋である。「これまであまりぱっとしなかった地味な存在、中国の西北隅におしこめられていた西魏政権の内部から生まれ出て、北周から隋へ、さらに唐へと発展していく」(307) 東晋から隋へは、南朝から北朝への転換である。

北での小さい問題として、北魏のあとの西魏・東魏のいずれかが正統かがある。「当時の実勢力を比較すると、東魏の方が、領土も広く、人口も多く、文化も進んでいたのも、歴史を叙述するには、東魏を軸とするのが自然である」(291)

正統論は歴史叙述にかかわる大問題である。どの政権が正統かによって書き方が大きく異なる。後世まで残る格付けである。

4 内 陸 水 運

次には、中国史上見逃されやすい内陸水運を取り上げているのが貴重である。ヨーロッパや日本における inland navigation の歴史を考えるのも有意義であろう。

「いったい中国の地形は、“南船北馬”といわれるように、揚子江流域ではクリークが多いので、船を重要な交通手段とすることにたいし、北方、黄河沿岸平野では、馬が輸送の動力を供給する。・・・船は積載量が大きいから、駄馬や馬車より何層倍も効果的である」(202)

南北朝時代の水運の記事を拾ってみる。下線は筆者による。

「前燕が洛陽を占領した。〔東晋の実力者〕桓温は出動し、淮水水系をつたって、山東方面から、黄河平野に進出した」(167) 桓温の出発地は、揚子江沿岸の首都建康か、彼の根拠地たる荊州であろう。とにかく揚子江から水路で黄河に達したのである。

「〔東晋の実権を掌握した〕劉裕は、北伐を決行し、淮水からその支流をさかのぼって北上した」(192)

「劉裕は北伐の目標として、洛陽と長安を支配している後秦を選んだ。・・・彼はその軍を三手にわけて進発した。主力軍はみずから将としてこれをひきい、淮水から運河をつたわって黄河へ出て、黄河をさかのぼって敵の本拠にむかう。この一軍は船隊を主としたもので、軍需品の補給を任務とする」(202) この運河は「軍隊輸送のため従来からあった黄河から揚子江までの運河」(324)を指すか。

揚子江以南では「建康から広東への正規の交通路は、江西を縦断する贛江の流れをさかのぼり、大庾嶺を越えて嶺南へ出るものであった」(194)

時代は下がるが「1058年、洞庭湖から、それに南から流入する湘江をさかのぼり、その水源と桂江の上流を結ぶ運河が出来たので、桂江を下って広東に達する」ようになった(宮崎『中国史』下 p 315)

さて隋の煬帝の大事業である。これは“開かれた大運河”という小見出しの下に説明されている。「西から東に向かって流れる5つの河川を縦に連結した」(324) この目的は「揚子江流域の物資を東北へ輸送するため」とあるが、「物資」という表現はあいまいで、米・茶・塩と具体的に書くのがよい。とくに米という最良の穀物を、南の産地から、北の大消費地たる首都に供給する意義は大きい。

5 安定政権

繁栄する王朝の例として、宇文氏の立てた北周が挙げられている。「宇文氏の一族は、おおむねまともな人間がそろっており、また側近の大臣や将軍も多くは武川鎮の出身であったので、国家をわがことのように考えて、堅固な団結を保った。この点は、南朝も北斉もはるかに及ばない北周の美風であった」(314) 武川鎮とは「長城を遊牧民族の侵入から守る前進基地で、鮮卑人を中心とし、中国人の豪族から選ばれた武人や、柔然族の降人が配属され、その将校の地位は世襲的に受け継がれた。寒い北風にさらされ、牛馬を伴侶として、いつ起こるか知れない北方騎兵の襲撃に備えるのは、並みだいていの苦勞ではない。この困苦は鎮の将士たちの団結を固めるのに役立った」(308)

個人は民族に尽くし、民族は国家を支える。その逆に、国家は民族を、民族は個人を思いやる。個人・民族・国家三者の調和があってこそ三者は安定する。この調和がなければ三者とも崩壊する。中国史上最もよい例として、清朝の康熙・雍正・乾隆期が挙げられよう。

6 新天子の生母の運命

西晋の八王の乱において、恵帝の皇后賈氏は皇太子を殺した。その叙述「この皇太子はもちろん賈氏の実子でない」(122) がわかりにくい。皇太子は皇后の実子であるのが常識であるからである。それに対する説明は後の頁に見える。すなわち

「中国の家族制では、正夫人の権力が強い。しかし子どもはその生母に親しむ。天子の家庭では、皇后と、太子の生母との間に葛藤が起りがちである。北魏王朝では、その弊害を心配して、未開民族の流儀で、一刀両断、太子の母は生かしておかぬことに定めた」(259) 「一刀両断」という表現は誤解を生む。文字どおり刀で体をふたつに切る刑罰があるからである。ここは比喩的に「断固として」の意味であろう。学術文には写実的表現が望ましい。さて内容として、太子の生母を殺すのは「未開民族の流儀」と、必ずしもいえないのではないか。いくつか例を引く。

「孝文帝の生母李夫人は、帝が立太子と決まると、先例に従って殺された」(265)

「〔孝文帝の死後〕新天子の宣武帝の母、高氏は、北魏の旧習に従って、帝の幼時に殺されていた。……宣武帝は皇子を太子に立てたとき、北魏の先例を破って、その母胡氏に死を賜わらなかった」(273)

北魏ではやく、道武帝が嗣(明元帝)を太子に立てようとした時、太子の母劉氏に死を賜わっ

ている。資治通鑑115によれば、その際、嗣に諭して、漢の武帝が鉤弋夫人（趙氏、昭帝の生母）を殺したのは「母后が政に予り外家が乱を為すのを、防ぐ」ためであった、という先例を持ち出している。

通鑑22では、武帝は自らの後継者の生母を殺した理由として、呂后が政治を乱したという。高祖なきあとの呂后の異常な行動は悪例として残った。宮崎『中国史』上p187にいう「武帝は子の昭帝に位を伝えることを決心すると、その母の趙氏が罪もないのに死を賜わった。信頼関係に甘えて呂氏事件の二の舞いに陥るのを予防したのである」

漢の武帝は、最初に立てた皇太子を自殺させている。父が子を、夫が妻を殺すのは、中国にもある習慣である。

7 北魏宮廷の言語

「孝文帝が中国文化の中心地、洛陽に遷都すると、その華化政策は、とうとうたる勢いをもって推進された。……中国的な官制がきめられ、服装も中国化され、さらに朝廷の用語までが中国語となり、母国語たる鮮卑語そのほかの胡語の使用が禁止された」（269）

「朝廷の用語までが」というのは、朝廷の用語は支配者たる鮮卑族の言語であるべきなのに、それすら中国語になった、と嘆く気持ちがこめられている。しかしこれは誤りである。鮮卑語は文字をもたなかったろう。それは洛陽を都とする中国的政權の公用語には絶対になりえない。中国的政權の公用語は中国語でなければならない。孝文帝はじめ鮮卑族上層階級は、公文書をよりよく作るために、積極的に中国語を学習したにちがいない。魏書、巻7、高祖本紀、太和十九年六月己亥の条には次のようにある。

詔不得以北俗之語言於朝廷。 詔して、北俗の語言を朝廷に於いて^{もち}いうるをえず

筆者の手元にある中国史概説書約10点の大部分では、「朝廷に於いて」を省略している。その重要さがわからなかったのであろう。しかしここが要点である。すなわち朝廷では、言語は公用語たる中国語だけを用いる。朝廷から出て、自宅に帰れば、鮮卑語を使うことに何の差し支えもないのである。つまり鮮卑族高官は bilingual の言語生活を送っており、それは彼らにとって屈辱ではなく、むしろ誇りであったろう。後進民族が母語を使うほかに、先進民族の言語を習得して、すぐれた文明を採用するのが、自らの発展に有益であるのは、明白なことである。

服装や名前も同様で、自宅では鮮卑服に着替えてくつろぎ、家族同士、気楽に鮮卑名で呼びあったのであろう。

8 そ の 他

○ 数字の意味

後漢、吏の最高位、三公の俸給は、月に米350石（約7000リットル）という（23）メートル法に換算するのは算術である。これで何人を養えるかを問題にすべきである。それがその人の勢力

の大きさを示すからである。

五斗米道(74,194)は、入信料が米5斗であるからこう呼ばれた、という。ここもそれだけでは不十分で、これがどの程度の負担なのか、1人何日分の食料かを考えなければいけない。貧民の相互扶助団体の会費であるから、重い負担ではあるまい。

陶淵明は、わずかの手当てのためにつまらぬ人に頭を下げたくない、と言った「吾不能為五斗米折腰、拳拳事鄉里小人邪」(晋書、陶潜伝)5斗の米が彼の1か月の俸給であったのか。これらの数字は当時の生活と関連させて評価すべきで、それが歴史学である。

○ 年代の問題

西晋、八王の乱について「河間王も殺され、同じ年に恵帝も毒にあたって死んだ(306年)」とある(123)資治通鑑86によれば、恵帝の死は光熙元年11月庚午(18日)、河間王のそれは同年12月壬午朔。ユリウス暦でそれぞれ、307年1月8日、20日に当たる。

同様な問題が唐の太宗=李世民の生年についてもある。本書は597年としているが(348)599年が正しい。多くの歴史辞(事)典は598年とする。彼の生まれは隋、開皇18年12月戊午(22日)で、ユリウス暦599年1月23日である。このことは外山軍治『隋唐世界帝国』p72の脚注に明記してある。中国暦の11月中旬ごろ以後を西暦に直すには注意を要する。

○ 小見出し

1. “秋風星落五丈原”(97)諸葛亮を主人公とした土井晩翠の長編叙事詩の題ならば、「星落秋風五丈原」が正しい。
2. “貧乏人は肉を食え”(118)「肉」を「麦飯」とすれば、1950年12月7日、参議院予算委員会での池田勇人蔵相の発言「所得の少ない人は麦を多く食う」、いわゆる「貧乏人は麦飯を食え」発言である。ついでにいうなら、本書には日本近現代史の事実が比較のためにたびたび出てくるが、それは著者の痛切な体験であっても、若い読者には昔の話でしかなく、理解に負担を感じるおそれがある。
3. “天下統一”(341)と“新旧勢力の交替”(345)は、入れ替えの要あり

○ 本書の河出版には索引があり、中公版には索引がなく解説がある。編集態度としては、前者がすぐれている。学術書に索引は不可欠であり、現存の人の著作に他人の解説は蛇足であるからである。

(1990. 9. 6 受理)